

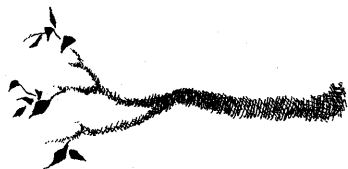
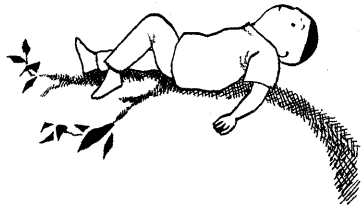
二十一世紀にむけて幼児教育を考える(3)

## 少子化時代の幼児教育

太田 次郎

わが国の出生率の急減が問題となったのが一九九〇年であるから、今年はそのとき生まれた子どもたちが、小学校に入学する年である。その後も、年により少し変動はあるが、出生率の減少傾向が続いている。つまり、子どもが少なくなる少子化時代が進行している。

幼児教育の分野で、この問題は「園の経営難」という観点で、主にとらえられているようである。どうやって幼児を集め、園の経営を安定化させるかに、園長先生方は、頭を悩ましておられる。確かに、そのことも軽視できないが、少子化の影響は、他の面でもいろいろ生じ



ている。特に、注目せねばならぬのは、幼児と母親との接触時間の变化である。その点で、今二極化が進んでいる。

一つの方向は、子どもの数が少なくなったために、母親の手が行き届くことである。それは決して悪いことではないが、ともすると甘やかに流れたり、同世代の他の子どもと接するよりも、母親のみと過ごす時間の多い子どもになったりする。

もう一つの方向は、職業をもつ母親が増加していることである。それも、男女共同参画の時代で、女性が責任のある地位を獲得するに伴って、子どもと接する時間が少なくなっている。その分、父親が平等に時間をさければ良いかも知れないが、わが国の現実はそのとはいかないことが多い。

こうして、少子化時代には、母親と接する時

間が多い子と少ない子の二方向に分れつつある。そして、この傾向は、今世紀末から来世紀にかけて、さらに増大していくであろう。

このことが、子どもの生活、特に幼児の行動にどうあらわれてくるかは、まだはっきりしていない。また、幼児教育の研究会でも、経営以外に、少子化の問題をとり上げて論じている例は少ないように思われる。

少子化で子どもは変わるのか、変わらないのか、もし変わるとしたら、どう変わるのかははっきりしていない。むしろ、「変わらない」ということを前提にして、幼児教育は展開されているように思われる。

幼児の教育で、目先の社会の変化に応じた変化は、のぞましくないと筆者は考えている。特に、時代を先取りするような変革は、軽率であると思われる。といっても、何も変わらなくて

良いといえるわけでもない。子ども自身が変化しているとしたら、それに対応しなければならぬ部分があることも否定できないであろう。

眼に見え、耳に聞こえる世界が変わっているから、幼児の遊びも、時代や環境の変化に影響されることは事実である。このことは、テレビのない時代と、現代とを比べてみれば明らかであろう。しかし、幼児にとって最も重要と思われる「遊び」が、どう変わったのか、それが少子化により変化を受けたか否かも、はっきりしていない。

実際に保育の現場にかかわる方々は、それぞれ身をもって体験されていることが多いに違いない。しかし、それが積み上げられ、後に続く人々へと伝えられていくという面が、幼児教育界では、少ないように思われる。毎年開催される研究会でも、同じことが繰り返し返される傾向が

強いように感じる。

このようなことを記すのは、決して大きな変化をのぞんでいるためではない。しかし、「幼児の本質は変わらない」と安住していると、やがて外圧等によって、のぞましくない変革が行われようとしたとき、それを防ぐ手だてが見い出せないであろう。

少子化という現実には、決して小さな問題ではない。それも、わが国だけでなく、先進諸国に共通した問題であり、それを防ぐ対策は、どの国でも余り成功していない。幼児教育界でも、この問題を各方面から広く考える時代になったのではなからうか。

(お茶の水女子大学)